

草創期

1926-1931
大正一五昭和六



建学の理想は石桜精神

本校は三田義正翁によって大正一五年に創立された。若き日、義正は東京で津田仙の私塾学農社に学んでいる。わが国における洋式農学の創始者であり、みずからの教育理念に基づいて私学を興した津田の薫陶を受けたことは、義正のその後の生涯に決定的な影響を与えた。本校誕生の萌芽も、じつにこの時代の義正の胸に胚胎したと言っても過言ではないだろう。

学農社を巣立ち郷里・盛岡に帰った義正は数々の苦

難を乗り越えて政界・実業界で力量を発揮したが、その間も彼の脳裏を去らなかつたのは人材養成の重要性についての深い確信であった。国の運命を左右するのは、教育である。ところが郷土・岩手は中等教育・高等教育の場に恵まれていない。ことにも個性豊かな逸材を輩出すべき私学が、きわめて少ないではないか。政財界で功成り名を遂げ、老境に達した義正は、機は熟したとばかりに年来の夢・私学設立へと動いたのだった。

義正のよき理解者の協力を得て設立された本校の出發は、市や県からの借り物であった校舎ひとつを取り上げてみても、誠に苦難に満ちたものだった。

しかし、岩手中学の名のもとに集まった諸先輩は、職員も生徒も創立者の意図をよく体し、一致協力して校風の樹立に努めた。創立者の建学の理想とは言うまでもなく「石桜精神」である。盛岡地方裁判所の庭にある石割桜は、樹齡三〇〇年を超す白ヒガン桜の老木である。周囲二メートル、高さ一・七メートルもある。巨大なみかげ石の割れ目に生えている。これを見て、義正は無言の教訓を学びとった。巨岩という、植物の生育を許すはずもない、苦難そのものの環境にも負けず、それを割るようにして根をおろし、しかも来る春ごとに美しい花を咲かせる石割桜こそ、人間の手本と思えたのである。

石桜精神を別の表現で言い換えれば、創立者が開校記念式典の式辞で述べているように、「質実剛健」という言葉になる。飾り気のない、真面目な人間、強く健やかな人間こそ、創立者の理想とする人間像であった。そして「石桜精神」「質実剛健」の理想と並んで、校規三大綱領の「積慶」「重暉」「養正」を校訓とした。これらの理想を具現化するための中心となったのが鈴木卓苗初代校長である。鈴木校長はみずからの教育方針を「学園主義」と呼んだ。すなわち、学校を植物園

にたとえ、生徒は植物の幼芽、職員はそれを育てる園丁であり、園丁である職員が十分な肥料を施し、害虫を駆除してやりさえすれば、植物の幼芽である生徒はそれぞれの個性に応じてすくすくと成長し、花咲かせ、実を結ぶようになるという考えである。その底には生徒に対する限らない信頼があり、当時としては珍しい自由主義・個人主義的な教育哲学であった。知識の詰め込みと試験による評価のみに終始して生徒の貴重な潜在能力を殺してしまうことを恐れる学園主義のもと、教室における授業の他に体育デーや勤労デー、遠足など多彩な内容の行事が年を通して数多く催され、それらの実践のなかで生徒の人格を高めようとする幅の広い教育が行なわれた。とくにスポーツとしてのクロスカントリーやラグビーの採用は、県下の中学校でも異彩を放っていた。昭和二年には、制定されたばかりの校旗を先頭に全職員・生徒二〇〇余名が岩手山登山を決行。この岩手山頂校旗樹立に象徴されるのは、自分たちの手で伝統を築き上げようとする、草創期の岩手中学にみまぎっていた旺盛な気概である。

昭和三年には本格的な寄宿舎「積慶寮」が開設され、昭和四年には借り受けていた盛岡市大沢川原の校地・校舎を県より買い取っている。同じ昭和四年に「重暉寮」、さらに昭和六年には「養正寮」が開設された。

岩手中学は草創期から発展期へと移っていく。